

【自由研究発表第4セッション 12月6日 12:50-13:25 C会場 523教室】

根幹から枯れ枝へ

東インドネシア、エンデにおける「生命の流れ」論

中川 敏

(大阪大学 名誉教授)

比較の領域としての東インドネシア (van Wouden 1935) の最も重要な特徴は、民俗理念型としての母方交叉イトコ婚に基づく三分法、すなわち、自己のグループ (OG)、およびそのワイフ・ギバー (WG) とワイフ・テイカー (WT) という三分法が社会の基本となっている点である。三分法の根底にあるのは WG/WT 関係である。フォックス (1980) は、東インドネシアのさまざまな民族誌に基づいて、WG/WT の関係を「生命の流れ」として捉えなおした。生命が WG から WT へと流れるのである。後の論文で、フォックスは、これまで「ワイフ・ギバー」と訳されていた語を、それぞれの民族誌の中で読み直すことで、"Progenitor" と訳すことを提案している (Fox 2006)。ある集団にとっての WG (集団) はラインをなしているのだ；そのラインは世代を越えて当該の集団を「生成」しているのである。

以上の背景のもとに、エンデの民族誌を見ていく。エンデにおいてもファン・ワウデンの言う三分法、あるいは基本となる関係、WG/WT 関係が見られる。しかし、いくつかの点で WG に関して、「不自然な」民族誌的事実が存在する。その一つが「男 (父) の背中」と呼ばれる WG である。説明しよう。エンデでは自己のグループ (OG) を規定する WG に二種類あるのだ。確かに、ファン・ワウデンも、またフォックスも、東インドネシアに時おり (ロティ、ケマック、マンバイなどに) みられる OG を規定する二種類の WG について述べている。WG (代表例として MB を挙げられよう) と、WG の WG (MB の MB、すなわち MMB) である。MMB が「生命」を MB に与え、その MB が「生命」を「わたしたち」(OG) にあたえるのだ。二つの WG は言わば「(生命の) ライン」をなしているのである。自然な「二つの WG」の選択となっていると言えよう。ところが、エンデでは二種類の WG は、MB と MMB ではなく、MB (「女 (母) の背中」と呼ばれる) と FMB (「男 (父) の背中」) なのである。この二つの WG の間には「ライン」は存在しない。

エンデで「男の背中」(FMB) という WG が選択されるのは、いったいどのようなロジックに基づいているのか、その答をさぐるのがこの発表の目的である。出発点は、東インドネシアという領域の中での、エンデの持つ特異さからはじまる。それは、エンデには (属性で定義される) 集団 (たとえば「氏族」、「リネージ」などなど) が存在しないという点である。エンデでは、集団はつねに錯綜する関係の中で、より正確には錯綜する交換の中に、浮かぶ儚 (はかな) いものでしかないのだ。そのような交換が、「女の背中」だけでなく「男の背中」をも必要とするという点を論証していきたい。

【自由研究発表第4セッション 12月6日 13:30-14:05 C会場 523教室】

インドネシアにおける *kiṃnara* と *kiṃnarī* について

伊藤 奈保子

(広島大学)

kiṃnara と *kiṃnarī* は人面鳥の男女をさす。形状は頭部または上半身が人型で、腰から下の半身は翼、鳥の足を有している。日本では遅くとも8世紀頃に伝播したと考えられ、仏具の華鬘を始め阿弥陀浄土図変相や涅槃図、建築の天井などに施され、仏教に取り入れられる場合は上半身がほぼ菩薩形である。また雅楽の曲目や舞踏にも表象される。

この人面鳥はインドが源流とされ、先行研究から紀元前1世紀頃のバールフット「ストゥーパの供養」や1世紀頃のサーンチー第一塔北門の浮彫など、広範囲に亘る時代と地域で報告がされている。本発表では、当時、現在のインドと中国を結ぶ海路の中継地点であったインドネシアに焦点を当て、その作例を挙げ特徴を述べる事としたい。そして最終的に、人面鳥の日本への伝播を各地域の図像検討から考察を試みる。

現地遺跡の作例は、代表的な3つの寺院をあげると、まず世界文化遺産登録のチャンディ・ボロブドゥール (Candi Borobudur) の第一回廊のレリーフ「バツラーティヤ王本生」(2場面)、『華嚴経』「入法界品」を題材にしたレリーフの第二回廊 (7場面)、第三回廊 (7場面) に男女一対で造形されている。次に、ボロブドゥールから東に約2kmのチャンディ・パウオン (Candi Pawon) は、仏教者の沐浴場と考えられ、祠堂の外壁3か所のレリーフに、如意樹 (kalpatal) を中央に配した男女一対が彫刻されている。また世界文化遺産登録チャンディ・プランバナナ (Candi Prambanan) は、シヴァ堂をはじめとする祠堂の基壇箇所、中央に如意樹を配し、その左右に人面で首から下が鳥の男女一対が外周し表されている。またこれらの遺跡と同時期に鑄造製女性 *kiṃnarī* のランプも確認できる。

調査の結果、以下の特徴が挙げられる。インドネシアではジャワ島の中部ジャワ地域の8~9世紀頃のシャイレンドラ朝とマタラム朝の仏教寺院およびヒンドゥー教寺院にその姿を確認することができ、インドネシアの人面鳥は宗教を問わずに受容されていたと考えられる。形状は頭部のみが人型、上半身が人型の二形式が確認でき、前者の場合、首から下の鳥に胸のふくらみがあれば女性であると判断できる。このようにインドネシアでは男女の性別が明白であり、一対で表現される事が多く、如意樹を中央に左右に配する場合、男性は正面右、女性は左に配される事が多い。装飾は、頭飾・耳飾は二形式を問わず全作例が有しており、上半身が人型の場合、胸飾・臂釧・腕釧を付け、手には払子また蓮華などを執る。

現段階では、これらの作例は10世紀以降王朝が東部ジャワへ移行した後、その姿は管見の限り確認ができない事から、8~10世紀頃のインドネシア美術が最も栄えた中部ジャワ期にこの造形が寺院装飾に好まれた事がうかがわれる。インドネシアでは男女が明確な事が導き出され、日本での人面鳥とは様相が異なる事が導き出される。今後は、インド、インドネシア、日本の作例の詳細な比較を試みたい。

【自由研究発表第4セッション 12月6日 14:10-14:45 C会場 523教室】

インドネシアにおける歴史的津波と災害対応の『伝統知』

中マルク地域を中心に

河野 佳春

(弓削商船高等専門学校)

2004年スマトラ島沖地震津波を契機に、インドネシアでは津波災害に対する関心が高まり、「伝統知」の再評価が進んだ。本報告は、それらとインドネシアを対象とした過去の津波に関する研究を踏まえて、報告者の主たる関心対象地域である中マルク（マルク諸島中央部）を中心に、歴史的津波災害事例と村落の防災・減災にかかわる「伝統知」を紹介し、考察を加える。

本報告での防災・減災の「伝統知」は、津波に限らず、さらに自然災害に限らず、地域紛争や侵略などの人災含めて対象とするもので、特定の自然現象に対する知識よりも、何らかの脅威に対して即応的に待避したり、長期的に避難する行動様式を実現しているものである。

これは、中マルクがインドネシアでも津波の多い地域であるが、それでもなお津波よりも高い頻度で、高潮や風波による浸水や、豪雨に伴う土砂災害が、発生するという自然環境に起因すると思われる。また現在に続く中マルクの村落社会が、首長国家形成に向かって、二つの勢力に分かれて争っていた時期に、香料貿易の発展にともなって北マルクや欧州など外部勢力の介入を受け、オランダ東インド会社に征服されることで成立し、その後もナポレオン戦争時のイギリスによる占領、パティムラ反乱、日本軍侵攻、南マルク共和国紛争、1999年地域紛争など、大規模な紛争を繰り返し経験しており、さらには現在もなお、村落同士や村落内部での小規模な紛争が多発する社会であることに基づくと思われる。

具体的には、中マルクの津波事例として、(1)1674年アンボン津波、(2)1899年エルバプティ津波を、おもに文献資料に基づき、(3)1950年アンボン津波を、おもに2023年のインタビューに基づいて、特に詳しく取り上げる。(1)(2)では地震直後に巨大な津波が襲い大きな被害が発生した。防災の余地はほとんどなかったように見えるが、それでも、居住地の選定や避難などの「伝統知」に一定の効果が認められる。(3)は、(1)(2)に比べて、津波の規模や襲来までの時間において好条件であったとはいえ、「伝統知」によって被害が極限に抑えられた事例である。当時は南マルク共和国紛争という政治的混乱の最中であり、また住民には津波の知識が無かったにもかかわらず、森林や高地という既定の場所に避難するという「伝統知」に基づく行動が、人的被害を最小に抑えた。

また津波以外の事例として、おもに近年の新聞報道から、地震、土砂崩れ、洪水、紛争などの発生状況と、それに対する対応状況を紹介し、前述した多様な自然災害、人災に共通する、防災・減災に関わる「伝統知」の存在を示す。